

『戌』は守りの年—

既存客を尊び、堅実を旨とすべし



理事長 内田 延佳

謹賀新年 旧年は大変お世話になりました。本年も宜しく願い申し上げます。

今年は「戌年」、戌年の傾向は「商売繁盛・収穫」の干支であった昨年の「酉年」の後になりますので収穫後の「守りの年」になります。ビジネスで言えば、アフターフォロー、リスクヘッジをすることで既存のお客様を守る、またそれが信頼とビジネスにつながっていく、そのような年です。

中小企業でも老舗と言われる百年企業のビジネスの根底には「今のお客様を大切にする」理念があります。堅実経営が基本なのです。京都の老舗料亭の精神「一見（いちげん）さんお断り」は「今のお客様が最優先」です。

人口減少で市場が縮小していく今からのビジネスの流れは量的拡大志向から質的向上志向への意識変革が必要です。目先の利益に囚われることなく、自社の強みを問い直し、その上で時代に対応する企業文化を作り上げることが必要であると思います。

評論家の田原総一朗氏は「日本の中小企業の社長はサラリーマンじゃない人が多い。大企業のサラリーマン社長には決定権がないが、中小企業の社長は自分で決めることができる。チャンスだ。『これから何で勝負するか！』を決めたほうが良い」と語られています。

また船井総研の情報誌に目を向けてみると、「経営に関わる決断を行うとき、社長には『時代を読む』力が必要です。時代を読むとは『今、何が起きているのか？ 自社の置かれた状況は？』という状況把握と『今後どうなるのか？ 何が起きようとしているのか？』という将来予測に基づいて、未来の構想を描くこと」のことでした。

業種を問わず経営者の仕事の中でも「時代をどう

読むか」は特に大切な仕事の一つです。時代を読めない経営者は川の流りに逆らって泳いでいるようなものです。

時代を読むときに重要なのは、過去の社会・歴史から学ぶことです。人類は600万年の歴史を持ち豊富な経験や英知を蓄積してきました。歴史は繰り返され、景気は寄せては返す波の如く好況不況を繰り返します。その荒波を乗り越えてきた百年企業は、不況時にも耐えてきた知恵と英知を「組織の遺伝子」として体得しています。

トランプ大統領の登場やイギリスのEU離脱で世界は大嵐ですが、その中であっても日本は政治も経済も比較的安定しています。しかし日本も多額の政府債務（1千兆円超）を抱えGDP（日本の国内総生産：約550兆円）と比べた国債発行規模の大きさは際立っています。また出生率の低下により世界で最も高齢化が進み、若年労働人口に対する高齢者人口の比率が最も高いことから労働者不足が経済の足を引っ張るリスクがあります。業種に関係なく人材確保は経営の大きな課題です。

海外では中国の動きに注目が必要です。多くの民族と14億人の人口を抱えた中国には強権的な政権でなければ統一ができない国内事情があります。国際関係のバランスを取りながら対応していくためには、日米韓の結束が問われるところです。

九州ビジネスネットワーク協同組合を設立して、無事8年余りとなりました。人生と同じで事業経営においても様々なことがあります。紆余曲折を経ながらも皆様のおかげで無事に組合事業を継続することができております。心より感謝申し上げます。

皆様のご多幸を祈念し、新年のご挨拶といたします。